

砂田周一氏 砂田燃系株式会社 代表取締役社長



砂田周一氏



タオルの原料となる糸には撚りがかかっている。今治のタオル産地で、この撚りの加工を専門におこなうのが砂田燃系（株）であり、その代表を務めるのが今回の「タオルびと」でとり上げる砂田周一氏である。撚りは、糸に強度を与えるのみならず、生地の間合いや肌触りに変化をもたらす。晒染加工とおなじく、撚糸加工はタオルの品質を左右する重要な準備工程である。創業から半世紀以上の砂田燃系の歩みとともに、撚糸加工業からみた今治タオルの歴史を振り返る。

すなだ・しゅういち ☆ 1958年3月、愛媛県今治市八丁西生まれ。今治市立立花小学校、今治市立立花中学校、愛媛県立今治北高等学校をへて、1976年4月に東京農業大学農学部に入學。大学では林政学を専攻。卒業後は帰郷し、1980年4月に今治市立立花農業協同組合（現・今治立花農業協同組合）に入組。JA今治立花でおよそ6年間流通・販売の仕事に携わる。その後、父親が創業した砂田燃系（株）に入社し、撚糸加工の現場を経験したのち2013年4月に同社代表取締役社長に就任。そして現在に至る。タオル生産量の減少にともない同業者が廃業していくなかで、砂田燃系は多品種少量生産および短納期において差別化を図り、現在も今治のタオル産地のモノづくりを支えている。

1. 幼少年時代

曾祖母、祖母に育てられた少年時代

砂田周一氏は、1958年3月4日、今治市八町西で代々農業を営む砂田家の三人兄弟の長男として誕生した。下には妹と弟がいる。父・^{まごひろ}孫宏氏は砂田燃系の創業者であり、創業当時は農業の副業として燃系加工業をはじめた。宇摩郡土居町（現・四国中央市）出身の母・重子氏は、兼業農家として米や野菜づくりを手伝いながら、燃系加工にも従事した。

砂田氏は、両親が仕事で多忙だったため、同居していた曾祖母と祖母に育てられた。曾祖母の光世氏の父親は曾我部右吉であり、愛媛県では名の知れた人物である。

曾我部右吉は、1864年に越智郡九和村与和木（現・今治市玉川町）に武田弥平太の三男として生まれ、17歳のときに桜井村の叔父曾我部勘太郎の養嗣子となった。1894年に桜井村の村長に就任後、長きにわたり要職を務めた。この間に植林治水と四阪島煙害交渉に尽力し、地域の安全・発展に大きな功績を残した。

蒼社川、頓田川流域では上流の官有山の荒廃によって大雨による洪水や日照りつづきによる渇水に悩まされていた。そこで曾我部右吉は、関係



網敷天満神社境内に建立されて

いる曾我部右吉の銅像

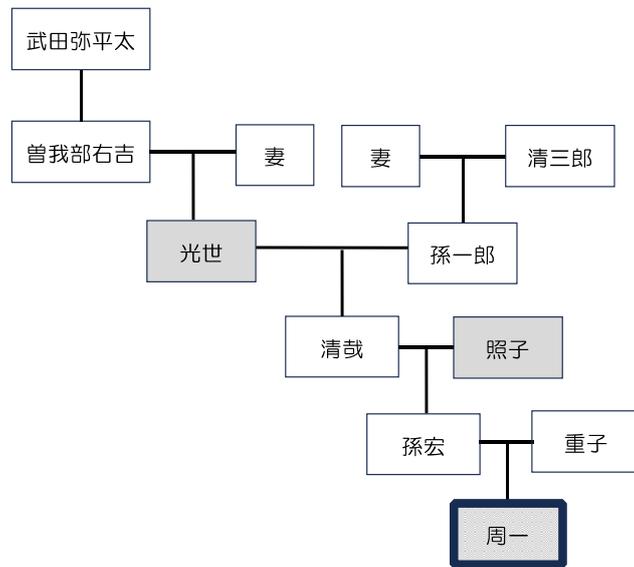
（写真出典：愛媛県生涯学習センター「曾我部右吉」『データベース「えひめの記憶」』）

各所に熱心に働きかけ、1891年に越智郡日高村をはじめとする13カ町村組合山（現・今治市玉川町及朝倉村共有山組合）として国より無償で払い下げを受け、1898年に同組合山管理者、1902年には同組合山組長となり、治山治水の考えのもとで植林造林事業に力を入れた。

その後、しばらくして別の問題が浮上した。1905年の四阪島製錬所の操業開始から亜硫酸ガスの排出による煙害が深刻化し、被害地が東予地区一帯に広がったのである。そこで当時桜井村の村長であった曾我部右吉が立ち上がり、被害者代表として別子鉱業所に対して粘り強く交渉しつづけた。その結果、1910年11月に農商務大臣官邸にて住友側代表と妥協交渉会開催に漕ぎつけ、交渉を成立させ煙害問題を解決に導いた。

これらの偉業を成し遂げた人物を父親にもつ曾祖母の光世氏に育てられた砂田氏は、幼いながらも曾祖母の品格と尊厳さを肌で感じていた。光世氏の息子である清哉氏は小学校の教員をしており、砂田氏の祖父にあたる。その清哉氏の妻である照子氏は砂田氏の祖母

家系図



にあたり、砂田氏は祖母の照子氏にも大切に育てられた。しっかり者の二人の女性と過ごす時間が多かった砂田氏は、砂田家の長男として家督を継ぐことを自然と自覚するようになり、大学進学で地元を離れ東京に出るときも曾祖母、祖母は口を揃えて「行ってこい」と見送ってくれた。

旅行好きは少年時代から

砂田氏は、1964年4月に今治市立立花小学校に入学した。「いったって普通の少年時代」を過ごしたと言う砂田氏であるが、旅行好きになったのは家族の影響が大きい。幼い頃から家族旅行で四国一円、九州方面、中国地方などにしばしば自家用車で連れて行ってもらい、知らない場所を旅して周るのがいつの間にか生活の一部となった。

1970年4月、砂田氏は今治市立立花中学校に入学し、この年に父親が農業に主軸を置きながら砂田燃糸を創業した。砂田家は、タオルづくりとは無縁であったが、タオル生産量日本一を誇る今治にあって、また今治で開発されたタオルケットの流行や国内のタオル需要の増加で労働力不足に頭を抱えていたタオル業界の要請に応えるかのように、燃糸加工業をスタートさせた。

立花中学校では部活動への所属が必須だったため、砂田氏は、部活を授業の延長線と位置付けてソフトテニス部に入部した。お世辞にもあまり熱心にとり組んだとは言えないが、学業では理科と社会、歴史が好きでコツコツと勉強した。旅行好きの砂田氏にとって中学校の修学旅行は楽しみのひとつであり、家族以外の人と出かけた初めての旅だった。行き先は九州で、関西汽船のフェリーに乗って長崎と別府、熊本を巡る2泊3日だった。

中学校を卒業した砂田氏は、1973年4月に愛媛県立今治北高等学校に入学した。高校時代も「別に変わったことはなく普通の高校生」だったと言う砂田氏であるが、旅行好きだけに高校での修学旅行もいい思い出として残っている。まず、今治からバスと列車を乗り継いで福井県に入り、曹洞宗の総本山である永平寺や国指定名勝の東尋坊を訪問した。次に、北陸三県の中心に位置する石川県金沢市に立ち寄った。そして、北アルプスを挟んで東側へ列車で移動して新潟県直江津市（現・上越市）経由で長野県に入り、長野市に

ある善光寺を参詣した。その日の宿泊先は北佐久郡軽井沢町の「星野温泉旅館」であった。星野温泉の開湯は1913年であり、星野国次が温泉の掘削をおこなったのが歴史のはじまりである。そして、星野国次は「星野温泉旅館」を開業し、初代から数えて4代目に当たるのが**星野佳路**  である。星野旅館は（株）星野リゾートに継承され、星野佳路によっていまや日本を代表するリゾートホテル運営会社に成長している。



善光寺本堂

（善光寺事務局文教課の許可を得て掲載）

長野県をへて、一行の最終目的地は東京都であった。東京都といっても広いが、やはり修学が目的の旅行だけあって政治の中心である霞ヶ関や、1958年の竣工以来東京のシンボルとなった東京タワーなどを巡った。帰路は新幹線と列車を乗り継いで今治に戻るといふ、いまの時

代でも豪華な国内団体旅行であった。

学業の方では、中学時代と同様に地道に努力を重ね、大学受験では東京農業大学に合格した。「いちどは今治を出て首都東京で外の風を浴びてみたい、今治を外から眺めてみたい」という気持ちがあった。また、曾祖母や祖母も「かわい子には旅をさせよ」と言わんばかりに「行ってこい」と背中を後押ししてくれたこともあり、嬉々として18歳で今治をいったん離れ上京した。

こうして1976年4月、砂田氏は東京農業大学農学部林学科に入学した。林学科を選んだ理由は、祖父の清哉が今治市玉川町及朝倉村共有山組合の組合長をしていたことが少し影響している。当時はまだ国産材が市場の半分ほどを占めていたが、徐々に輸入材が浸透

はじめ、砂田氏が東京農業大学に入学した1970年代半ばは林業において転換期の時代だったと言えよう。

東京農業大学は、実学の必要性を説いた榎本武揚の声かけによって1891年に設置された「育英^{いくえい}農^{いこう}業科」を原点とし、そこから独立して1893年に設立された東京農学校を前身にもつ。東京農学校の初代学長は、明治農学の第一人者として名高い横井^{ときよし}時敬  であり、徹底して実学主義を貫いた。横井時敬の父・時教は横井小楠の高弟であり、また時敬は熊本洋学校でL.L.ジェーンズ  のもとで学問に励んだことから今治とも縁がある。横井小楠とL.L.ジェーンズを結ぶ人物が横井時雄である。横井小楠の長男である横井時雄は、熊本バンドのメンバーであり、新島襄の同志社大学で学び、今治教会の初代牧師となり、今治のタオルづくりのきっかけを与えた。

東京農学校に話を戻すと、同校は、1918年の「大学令」公布を受けて東京農業大学へ昇格を果たし、日本を代表する私立の農業大学として地歩を固めていった。東京農業大学と言えば「大根踊り」が有名だが、これは1952年に誕生したものである。

農学部林学科では授業や課題をこなすのに毎日が忙しく、砂田氏は、世田谷区桜丘にある大学と、おなじ世田谷区下馬にあった下宿先の東予学舎（1984年に調布市に移転）の間を片道30分の路線バスで往復する日々を過ごした。

東予学舎とは愛媛県東予地域の学生のための男子寮であり、砂田氏にあてがわれた4階の部屋からは冬の晴れた日に富士山を眺望できた。東予学舎での生活で砂田氏は同窓生以外の学生とも友だちになり、楽しい寮生活を送った。東予学舎は常時60名ほどの学生が住んでおり、学業に多くの時間を割かれた学生生活ではあったが、寮に戻ると修学旅行気分を味わえた。東予学舎では年に一回の恒例行事があり、貸切バスで千葉県のマザー牧場や栃木県の日光、静岡県伊豆などへ寮生たちと旅行にも出かけた。そのほかに寮主催の寮生対抗ソフトボール大会が開催されたり、新年会や新入生歓迎会、卒業生送別会、誕生会などもあったり、毎月何かしらの交流行事が

あってその都度「大根踊り」は十八番であった。寮では学生たちに有益な情報も掲示板を使って伝えられた。たとえば、アルバイト募集のチラシも常時貼ってあり、砂田氏は選挙ポスター貼りの臨時でのアルバイトをやったこともある。

旅行ではないが、校外実習で群馬県に足繁く通った。林政学を専攻していた砂田氏は、群馬県のなかでも妙義山へはよく調査研究に出かけた。現地までは電車を乗り継ぎ、最寄り駅からは徒歩で向かうという長旅であった。林政学とは、林業生産と森林管理に関わる政策を考える学問であり、自然科学的アプローチというよりもむしろ社会科学のアプローチをとる。そのため、現地では伐採現場を見学したり、集落調査をおこなったり、山に族生する植物を観察したりした。



妙義山

（画像提供：富岡市）

砂田氏にとって^{ふんけい}兎頸の交わりで結ばれた友との出会いや林学科で培った経験は人生の宝物となり、4年間の東農大での学生生活は実りの多いものとなった。

（次号につづく）

